



TITLE:

『世宗實錄』地理志姓氏條の基礎的考察

AUTHOR(S):

濱中, 昇

CITATION:

濱中, 昇. 『世宗實錄』地理志姓氏條の基礎的考察. 東洋史研究 1984, 43(2): 310-337

ISSUE DATE:

1984-09-30

URL:

<https://doi.org/10.14989/153946>

RIGHT:

『世宗實錄』地理志姓氏條の基礎的考察

濱 中 昇

はじめに

一 『世宗實錄』地理志姓氏條の典據

1 『關』について——『世宗實錄』地理志姓氏條と『慶尙道地理志』姓氏條との比較——

2 『古籍』について——『世宗實錄』地理志姓氏條と『新增東國輿地勝覽』姓氏條との比較——

二 『世宗實錄』地理志姓氏條の基本的性格

おわりに

はじめに

『世宗實錄』地理志には郡縣ごとに姓氏が記録されており、高麗及び李朝初期の歴史を研究する上で貴重な史料となっている。李朝初期には、『世宗實錄』地理志の他にもいくつかの地理志が編纂されており、『慶尙道地理志』・『新增東國輿地勝覽』には姓氏が記録されているが、これらのなかでは、『世宗實錄』地理志姓氏條の記録が最も信頼性の高いものと考えられている。従って『世宗實錄』地理志の姓氏條は、高麗郡縣制度の研究をはじめとして様々な分野で数多くの研究者によって活用されてきたが、しかし従来、この姓氏條そのものが正面から検討されることはほとんどなかった。それ故、姓氏條の記載に關して、基本的な事柄さえも研究者の共通理解を得るまでには至っていないのが實狀である。

近年の吉田光男「李朝初の地方支配について——『世宗實錄』地理志姓氏條の性格検討をめぐる——」（『社會經濟史學』四四の五、一九七九年）は、比較的簡單なものではあるが、姓氏條を正面から検討した唯一の論考であった。地方支配の前提として地方社會の實狀を正確に把握することが、地理志編纂の目的であったとする吉田氏は、いくつかの論據に基づいて『世宗實錄』地理志姓氏條を郷吏の姓氏が集成されたものとみる。李朝初期の地方社會において郷吏が依然として強固な勢力を保持していたとする氏は、姓氏條における姓氏記載の目的を國家による郷吏の掌握という点に見出すのである。

『世宗實錄』地理志姓氏條は、從來漠然と、各郡縣を本貫とする姓氏の集成であろうと考えられてきた。これに對して、このような通説を否定し、それが李朝初期における郷吏の姓氏の集大成であったとする吉田光男氏の議論は實に興味深いものがあり、確かに一定の根據があるように見受けられる。しかし、吉田氏の問題關心は、氏の論考の標題にみられる如くもっぱら李朝初期の地方支配に注がれていた。『世宗實錄』地理志姓氏條は李朝初期に編纂されたものではあるが、實際には高麗時代の姓氏が集成されているといつても過言ではない。姓氏條に記された土姓・村姓・入鎮姓・入姓・來姓などの姓種は、高麗における姓氏のあり方を傳えているのである。姓氏條の性格を明らかにするためには、李朝初期社會との關連で姓氏を把握する觀點と並んで、高麗の時代及びその社會に即して把握する觀點が是非必要であらう。

高麗時代には、州・府・郡・縣のみならず郷・部曲・所などさまざまな種類の地方行政區畫が設置されたが、これらはみなそれぞれ獨自の領域を有して、他の行政區畫と領域が重なることはなく、また、それぞれが特定の身分的性格を帯びていた。そして、行政區畫を構成する各村落の住民は、それぞれ同一の姓氏を稱していた。郷・部曲・所などの場合には、一個の同姓村落がそのまま一個の行政區畫とされるのが普通であったが、州・府・郡・縣の場合には、複数の村落の住民が同一の姓氏を稱したらしく、しかも、一個の行政區畫は複数の姓氏集團から構成されるのが普通であった。高麗國家は、郡縣制度ないし地方行政制度の形成過程において人民を姓氏集團として把握したのであり、各行政區畫は一個ない

し複数の姓氏集團から構成されていた。そして、『世宗實錄』地理志姓氏條に記録された姓氏のほとんどは、そのみなもとに遡れば、このような高麗前期における姓氏集團の姓氏なのである。

旗田巍「高麗王朝成立期の『府』と豪族——郡縣制度の性格の一端——」（『法制史研究』一〇、一九六〇年）以来の高麗郡縣制度研究において、『世宗實錄』地理志姓氏條は、いうまでもなく不可欠の史料として活用されてきたが、しかし従来、姓氏條の活用の仕方において断片的な傾向がないではなかった。近年、高麗郡縣制度の研究が停滞氣味であることは、姓氏條のこのような扱い方と無關係ではなからうと思う。それ故、高麗郡縣制度の研究ひいては身分制度の研究を今後いっそう深めるためには、『世宗實錄』地理志姓氏條そのものが全面的に検討されなくてはならない、というのが筆者の考えである。

『世宗實錄』地理志姓氏條の研究は、體系的に行われなくてはならないと思う。姓氏條に記された各姓種の理解が研究者によってまちまちであるのは、従来、姓種全體に對する統一的把握がなされてこなかったからであった。本稿は、『世宗實錄』地理志姓氏條に關する體系的研究の第一歩として執筆するものであり、先ず姓氏條の典據となつた二種類の文書の性格を検討し、それをふまえて姓氏條の基本的性格を考察しようと思うが、自ずから姓氏條の性格についての吉田氏の見解も検討されることにならう。

一 『世宗實錄』地理志姓氏條の典據

1 『關』について——『世宗實錄』地理志姓氏條と『慶尙道地理志』姓氏條との比較——

『世宗實錄』地理志姓氏條は、どのような文書に基づいて記載されたか。また、姓氏條に記された各姓種の相互關係はどのようなものであったか。これらについて理解を深めるためには、先ずもつて次の記録が検討されなくてはならない。

A 土姓三、李・安・金、加屬姓三、朴・盧・張（此の六姓は、古籍及び今の本道の關に據りて之を録す。其れ加屬と云うは、古籍に書す所なり。後は皆な此に倣う^①）、亡姓五、尹・石・韓・池・素（凡そ亡姓と稱するは、古籍に有る所にして今は無き者を謂う。後は皆な此に倣う）『世宗實錄』地理志・京畿廣州牧。

B 迷原莊續姓一、咸（右の咸氏は古籍に無き所、今、本道の關に據りて續き録す。後に凡そ續姓と言うは此に倣う）『世宗實錄』地理志・京畿楊根郡。

史料Aによれば、土姓・加屬姓とされた六姓は『古籍』と『關』のいずれにもみえる姓氏であり、「加屬」というのは『古籍』にだけ記された名稱であつた。また、亡姓は『古籍』のみであつて『關』にはみえない姓氏であるが、これとは反對に續姓は、史料Bによれば、『古籍』にはなくて『關』にだけ記された姓氏であつた。

『世宗實錄』地理志の編者は、少なくとも『古籍』と『關』を典據として姓氏條を記録したことが知られる。史料A・Bにみえる『關』は、一例を挙げれば、「禮曹、咸吉道監司の關に據りて啓す、……」（『世宗實錄』卷二八、七（一四二五）年四月庚子）とあるように、道監司の報告書をさす。史料Aには「古籍及び今の本道の關に據りて之を録す」とあり、Bには「今、本道の關に據りて續き録す」とあるから、地理志姓氏條の典據とされた『關』は、地理志編纂當時において各道の監司から送られてきた報告書であつたことがわかる。^②端宗二（一四五四）年に成つた『世宗實錄』の地理志は、世宗一四（一四三三）年の『新撰八道地理志』に若干の増補を附したものであり、『新撰八道地理志』編纂の命が下つたのは世宗六（一四二四）年のことであつたとみられる。^③それ故、姓氏條の典據とされた『關』の年代は、世宗六（一四二四）年から世宗一四（一四三三）年までの間と考えられるけれども、もう一つの典據である『古籍』は正體不明であり、從來漠然と高麗の古記録とみなされてきたにすぎない。高麗のいつ頃であつたかというのは、姓氏條全體の分析を通して考察しなくてはならない問題である。

史料A・Bによれば、加屬姓という姓種は『古籍』にだけ記された名稱であり、亡姓・續姓は地理志の編者が新たに附

けた名稱であつた。それでは、『古籍』に加屬姓とされた姓氏は、『關』においてどのような姓種名が附されていたのであろうか。また、新たに亡姓とされた姓氏は『古籍』において、續姓とされた姓氏は『關』において、それぞれのどのような姓種名が附されていたのであろうか。

史料Aに土姓という姓種名に關する説明がみられないのは、『古籍』と『關』の兩者に土姓という名稱が使われていたからであらう。加屬姓については、「其れ加屬と云うは、古籍に書す所なり。後は皆な此に倣う」ということの意味が必ずしも明らかではない。加屬姓は地理志姓氏條において唯一、史料Aにだけ記された姓種であるから、加屬姓に關して「後は皆な此に倣う」というのは意味をなさない。そこで、加屬姓に關して「後は皆な此に倣う」と記されたのは一つの例としてであつて、土姓以外の來姓や村姓なども加屬姓と同様に『古籍』にだけ使われた姓種であつたと考えられるかもしれない。しかし、このような解釋は次のように成立しがたい。

姓氏條には、同一の郡縣内の異なつた姓種に、同じ姓氏の記されていることが少なくない。たとえば、忠清道の沃川郡には土姓と來姓とに全氏がみえ、同じく忠清道の平澤縣には土姓と村姓とに朴氏がみえる。また、清州牧では土姓と亡來姓とに金氏がおり、土姓と亡村姓とに韓氏がいる。亡來姓の金氏と亡村姓の韓氏は『古籍』のみにあつて『關』にはみえない姓氏であるが、このように土姓と共通した姓氏であるにも拘らず、土姓の金氏・韓氏とは區別されて「亡來姓」・「亡村姓」と判定されたのは、もともと『關』においても土姓と並んで來姓・村姓という姓種名が使われていたからに違いない。『古籍』のみならず『關』においても、沃川郡の全氏は土姓と來姓とに區別され、平澤縣の朴氏は土姓と村姓とに區別されていたとみてさしつかえなく、それ故、來姓・村姓を加屬姓と同様に『古籍』にだけ使われた姓種とみるわけにはいかなのである。

史料Aにおいて加屬姓とされた姓氏は、『關』には別の姓種名が記されていたのではないかと思う。⁽⁴⁾ 地理志の編者は『古籍』の方の姓種名を採用し、このように同一の姓氏に關して『古籍』と『關』とで異なつた姓種名の使われる例がほかに

もあることを豫想して、「後は皆な此に倣う」と記したのであろう。また、亡來姓・亡村姓は『古籍』には來姓・村姓と記されていたはずであり、しかも地理志には咸吉道の預原郡・宜川郡以外には亡土姓という記載はみえないから、史料Aに單に亡姓とあるのは、『古籍』では土姓とされていたとみてよい。問題は史料Bにみえる續姓であって、これが『關』においてどのように記されていたかについては、若干の考察を必要とする。

先に、『世宗實錄』地理志姓氏條の典據とされた『關』の年代を世宗六(一四二四)年から世宗一四(一四三二)年までの間としたが、世宗七(一四二五)年に成った『慶尙道地理志』は中央における地理志編纂の資料の一つとして慶尙道監司から送られた報告書であるから、『慶尙道地理志』姓氏條と『關』との關係が明らかにされなくてはならない。『慶尙道地理志』姓氏條は、『世宗實錄』地理志・慶尙道の姓氏條と比較すると次のような特色をもつ。第一に、部分的には詳しいところもあるが、全體としては『世宗實錄』地理志のそれよりも姓氏記載が簡略であること。第二に、亡姓という姓種名が使われていないのはある意味では當然のことであるが、『世宗實錄』地理志に亡姓とされた姓氏を土姓として記載した郡縣がある一方、亡んだ故に記載しなかった郡縣もあって、その記載方式に統一性がみられないこと。第三に、姓種名として續姓がみえないのは至極當然であるが、『世宗實錄』地理志に續姓として記載された姓氏のうち、『慶尙道地理志』にみえるのはその十分の一程度であり、それらは土姓ないしは來姓として記されていること。第四に、『世宗實錄』地理志では村姓・次姓・人吏姓・來姓・賜姓などとされた姓氏が、『慶尙道地理志』では土姓となっている例があること。『世宗實錄』地理志姓氏條と比較した場合の『慶尙道地理志』姓氏條の特色をこのようにまとめてよいとすると、『世宗實錄』地理志姓氏條が典據とした『關』は、少なくとも姓氏の記録については『慶尙道地理志』とは全く別個のものであったとみなくてはならない。

『慶尙道地理志』姓氏條は、郡縣ごとの姓氏記載に一貫性がみられず、『世宗實錄』地理志に續姓として記された姓氏の大部分を載せていなかった。また、土姓・來姓・村姓などの記載も不十分なものであった。中央における地理志編纂の擔

當者は、高麗時代の古記録である『古籍』と比較・對照しながら、地理志編纂の資料としての『慶尙道地理志』姓氏條をきわめて不十分なものであったと判斷したはずである。不十分であつたのは『慶尙道地理志』姓氏條だけでなく、世宗七(一四二五)年前後に慶尙道以外の各道の監司から送られてきた報告書も同様であつたと考えてよい。恐らく一定の基準にもとづく姓氏の再調査があらためて各道の監司に對して命令されたのであり、その命令に應ずる報告書こそが、まさしく『世宗實錄』地理志姓氏條の典據とされた『關』であつたと思う。

再調査が命ぜられた際の基準として、すでにいなくなつた姓氏を記録しないという項目があつたに違ひない。現に存在する姓氏だけが記録されれば、これを『古籍』と比較することによって、『世宗實錄』地理志にみられるように亡姓を把握することが可能となるからである。また、『慶尙道地理志』は、『世宗實錄』地理志において續姓とされた姓氏、即ち『古籍』が作成された後に他處から移つてきた姓氏の記録がきわめて不十分であつたから、この點の是正も強く求められたに違ひない。そして『世宗實錄』地理志で續姓とされた姓氏が『關』では何とよばれたかということが問題だったのであるが、それは恐らく來姓ではなかつたかと思う。

土姓が早くから土着した姓氏をさすのに對して、來姓は後代に他處から移つてきた姓氏をさす。すでに『古籍』には土姓と來姓とが區別されていたが、姓氏に關する報告を求められた各道の監司にとっては、『古籍』に來姓として把握された姓氏と『古籍』作成以後に新たに移つてきた姓氏とを區別するのは困難だつたはずであり、兩者は一括して來姓として把握されるはなかつたと思う。『世宗實錄』地理志に續姓とされた姓氏のうち、その一部が『慶尙道地理志』にもみえ、それらは土姓ないし來姓として記されていたが、土姓とされたのは多分間違ひであり、『慶尙道地理志』姓氏條の不正確さを示すものであろう。『世宗實錄』地理志に來姓・續姓とされた姓氏のうち、どこから移つて來たかが明らかな場合には、割註として「○○來」の如く郡縣名に「來」字が附されるのが普通である。北方に位置する平安道・咸吉道に移つてきた入鎮姓・入姓の場合に割註として郡縣名だけが記され、「來」字が附されなかつたのとはすこぶる對照的であるが、

續姓とされた姓氏の割註が來姓のそれと同じく「○○來」と記されたのは、續姓とされた姓氏がもともと『關』では來姓であつたことをもの語るものであらう。

先に述べたように、『世宗實錄』地理志では村姓・次姓・人吏姓・來姓・賜姓などとされた姓氏が、『慶尙道地理志』では土姓となっている例があつた。これらは、『慶尙道地理志』編者の杜撰さぶりを示すものというよりも、かつては村姓等であつたのが、『慶尙道地理志』の編纂された世宗代當時においては既に忘れられて、土姓と觀念されていたというところの反映かもしれない。そうであれば、『世宗實錄』地理志に續性とされた姓氏の一部が『慶尙道地理志』において土姓とされたのも、當時の觀念の反映と考えられるのであり、むしろ『慶尙道地理志』姓氏條獨自の史料價値の一端は、このように姓種表記において世宗代當時の觀念が反映されているという點に見出すことが可能であらう。この點については『關』も同様であつたと思われるが、『古籍』と比較・對照されることによって『關』の記載のうち當時の觀念を反映した個所は訂正されることになった。既に述べたように、『世宗實錄』地理志の編者は、同一の姓氏に關して『古籍』と『關』とで異なつた姓種名が使われた場合には、『古籍』のそれを採用したからである。

『慶尙道地理志』姓氏條と比較すると、『關』には、『世宗實錄』地理志において續姓とされた姓氏、即ち『古籍』が作成された後に他處から移つてきた姓氏が詳細に記録されることになった。多分、戸籍が参照されることによってそれが可能となつたのであらう。そしてまた、『關』には當時現存する姓氏だけが記録されたから、『慶尙道地理志』姓氏條と比べると、世宗代當時の郡縣ごとの姓氏のあり方はかなり正確に反映されているものとみてよい。

このように、『世宗實錄』地理志姓氏條が典據とした『關』は、世宗代當時の姓氏の記録としてかなり正確なものであつたと考えられるが、しかし、『世宗實錄』地理志姓氏條を歴史研究の史料として活用する場合には、『關』があくまでも當時現存する姓氏だけを記録したという點がとりわけ注意されなくてはならない。要するに、『古籍』作成後に他處から移つてきた姓氏のすべてが『關』に記録されたわけではなく、それらの姓氏のうち『關』作成前に再び他の郡縣へ移つて

いった場合には、當然のことながら『關』の當該郡縣條には記録されなかった。この點は、第二章において具體的に言及するつもりである。

『世宗實錄』地理志姓氏條は、『關』を典據とした限りにおいて李朝初期の姓氏のあり方を反映するが、一方、『古籍』を典據とした限りにおいて高麗時代の『古籍』作成當時における姓氏のあり方をも反映する。『世宗實錄』地理志姓氏條の基本的性格を明らかにするためには、『關』と並んで『古籍』の性格について一定の知見を得ることが必須の前提条件であって、それが次の課題である。

2 『古籍』について——『世宗實錄』地理志姓氏條と『新增東國輿地勝覽』姓氏條との比較——

『新增東國輿地勝覽』卷三、漢城府姓氏條には、次のような割註がある。

C 姓氏は、並びに周官六翼・尹淮地理志・慶尙全羅兩道觀風案に依る。

成宗一二（一四八二）年に成った『東國輿地勝覽』は、その後たびたび増修され、最終的には中宗二六（一五三二）年に『新增東國輿地勝覽』となったが、史料Cには姓氏條の典據として『周官六翼』・『尹淮地理志』及び慶尙・全羅兩道の『觀風案』が挙げられている。『周官六翼』は高麗末期の金社の著作物であり、⁽⁵⁾『尹淮地理志』というのは『世宗實錄』地理志をさす。⁽⁶⁾『觀風案』は『關』と同様に道監司の報告書とみられるが、『新增東國輿地勝覽』風俗條にしばしば引用されているので、風俗・習慣を中心としたものであったらしい。姓氏に關してどの程度記録されていたのかは、判然としない。慶尙・全羅兩道以外の姓氏に關して『新增東國輿地勝覽』では、『周官六翼』と『尹淮地理志』すなわち『世宗實錄』地理志とが典據とされた。『世宗實錄』地理志姓氏條が典據としたのは、世宗代の『關』と高麗時代に作成された『古籍』であったから、この『古籍』と『周官六翼』との關連が注目されよう。『周官六翼』は高麗末期のものであるから、『古籍』というのはあるいは『周官六翼』そのものであったかもしれない。⁽⁷⁾ 假に兩者が別個のものであれば、姓氏記載内容の違

いが明らかにされなくてはならない。

④『新增東國輿地勝覽』姓氏條は、『世宗實錄』地理志姓氏條と比較すると次のような特色をもつ。第一に、一般郡縣についていえば、『世宗實錄』地理志に記された姓氏が『輿地勝覽』⑤『新增東國輿地勝覽』を、以後このように略稱する。にはみえないということが稀にはあるけれども、全體としては姓氏の記録がややくわしくなったことである。第二に、郷・部曲・所などの姓氏の記録がかなりくわしくなったことである。『輿地勝覽』姓氏條に新たに記された郷・部曲・所などの行政區畫名はかなりの數にのぼり、それぞれ姓氏が記録された。第三に、姓種に關しては、おおよそ次のような原則に基づいて記録されている。

イ『世宗實錄』地理志姓氏條の土姓・次姓に該當する姓氏には姓種を記さない。

ロ 現存する姓氏と亡姓とを區別しない。

ハ 吏姓・村姓・驛姓には、それぞれ「吏」「村」「驛」字を註記する。

ニ 賜姓は、そのむねを註記する。

ホ 他處から移ってきた姓氏で、本籍が明らかな場合には、その郡縣名を註記してその姓種は記さない。

ヘ 他處から移ってきた姓氏で、本籍が不明な場合には、「來」「續」「屬」字のいずれかを註記する。

『輿地勝覽』姓氏條の姓種記載は、『世宗實錄』地理志のそれに比べて大幅に簡略化されたといつてよいであろう。それでは、以上のような『輿地勝覽』姓氏條の特色に基づいて、『古籍』と『周官六翼』との關係については、どのようなことが推測できるであろうか。

慶尙・全羅兩道以外の地域については、『輿地勝覽』姓氏條は、『世宗實錄』地理志と『周官六翼』だけが典據とされたから、『輿地勝覽』の姓氏記載が『世宗實錄』地理志のそれよりもくわしい部分は、もっぱら『周官六翼』に依據したものとみてよい。そして郷・部曲・所などの姓氏については、『世宗實錄』地理志が典據とした『古籍』においても『周官

六翼』と同じ程度にくわしく記録されていたけれども、何らかの理由で一部の郷・部曲・所等のそれが『世宗實錄』地理志姓氏條には記載されなかった、ということも十分に考えられる⁽⁸⁾。しかし、『古籍』に記された一般郡縣の姓氏は、すべて『世宗實錄』地理志に轉記されたはずであるから、一般郡縣の姓氏記載に關して『世宗實錄』地理志よりも部分的にくわしい『周官六翼』は、『世宗實錄』地理志が典據とした『古籍』とは全然別個の書物であったと把握するほかないであらう。

『古籍』は、『周官六翼』よりも古い書物であろうと思う。一般郡縣の姓氏記載に關して、『古籍』よりも『周官六翼』の方がくわしいのは、『古籍』作成以後に他處から移ってきた姓氏が『周官六翼』には記録されているからであらう。『古籍』作成以後に移ってきた姓氏が高麗末期の『周官六翼』には記録されたけれども、その後再び他の郡縣に移っていったために世宗代の『關』には記録されなかったというのは十分に考えられることであり、一般郡縣の姓氏記載に關して、『世宗實錄』地理志よりも『周官六翼』の方が部分的にくわしいというのは、このような場合なのである。『世宗實錄』地理志には『周官六翼』がいくつかの個所で引用されているけれども、姓氏條では全く引用されていない。『世宗實錄』地理志の編者は姓氏條を記録するに當って、煩雜さを避けて『古籍』と『關』のみに依據し、『周官六翼』は姓氏條を記録するための材料としては意識的に除外したのであらう。

『輿地勝覽』姓氏條の姓種記載は、先に述べたように『世宗實錄』地理志のそれに比べて大幅に簡略化された。『世宗實錄』地理志の姓種記載が雜然としているのとはすこぶる對照的であり、『輿地勝覽』の編者が一定の方針のもとにそれらを整理したのであらう。或は『周官六翼』における姓種表記の影響を受けているのかもしれないが、それを推測するだけの材料がない。ともあれ、ここで述べておきたいのは、姓種記載の簡略化がかなり杜撰に行われたということであって、史料としての『世宗實錄』地理志姓氏條の價值の一端を明らかにするために、『輿地勝覽』姓氏條における姓種記載の杜撰さについて若干言及する必要がある。

『輿地勝覽』卷三、漢城府姓氏條には、先に掲げた史料に續いて、

D 凡そ他州より來居せるは、姓の下に只だ本籍を註す。後は此に倣う。

とあり、同卷四、開城府姓氏條の割註には、

E 凡そ他州より來居して本籍考う可からざるは、只だ來と注し、或は續と云い、或は屬と云う。後は此に倣う。

とある。史料A・Bにおいて『世宗實錄』地理志の編者が加屬姓・續姓について説明を加えたのとは對照的に、『輿地勝覽』の編者は、「續」字や「屬」字の註記が「來」字を註記する場合とどのように異なるのかについて何ら説明をしていない。そして、史料Dの如く、どこから移ってきたかが明らかな場合には、ただその郡縣名を註記するだけで、姓種はいっさい記さないが、史料Eの如く、他處から移ってきた者のうち本籍が不明な場合にのみ「來」・「續」・「屬」字のいずれかを註記するというのでは、中途半端のそしりを免れないであろう。しかも、「來」・「續」・「屬」字の註記の仕方が杜撰そのものであった。

『世宗實錄』地理志において續姓とされた姓氏は、『輿地勝覽』においてもそのまま續姓とされるのが普通であるが、「來」字が附される例も少なくない。一方、『世宗實錄』地理志で來姓とされた姓氏が『輿地勝覽』において續姓とされる例もしばしばみられる。黃海道 of 信川郡・文化縣、江原道の通川郡のように、同一の邑における來姓と續姓が、『世宗實錄』地理志と『輿地勝覽』とですっかり入れかわっている場合もある。續姓は『世宗實錄』地理志において設定された姓種であるから、『世宗實錄』地理志において來姓とされた姓氏が『周官六翼』の記録に基づいて『輿地勝覽』では續姓に書きかえられた、とみるわけにはいかない。編纂者の恣意を見出すはかないのである。

加屬姓は、『世宗實錄』地理志において唯一、廣州牧にみられるだけであるが、『輿地勝覽』においては廣州牧だけでなく楊根郡・樂安郡・成川都護府にも「屬」字の註記された姓氏がある。「屬」字が附された楊根・樂安・成川の姓氏は、『世宗實錄』地理志ではそれぞれ亡姓・續姓・續姓となっている。『周官六翼』ではこれらが加屬姓となっていて、『輿地

『勝覽』の編者がこれに依據したということも考えられるが、しかし、その可能性はごく少ないと思う。『世宗實錄』地理志に唯一みられる加屬姓はもともと『關』にはみえず、『古籍』にだけ使われた姓種であったから、『古籍』作成以後に移ってきて續姓とされた姓氏が、『周官六翼』において加屬姓とされていたとは考えられない。それ故、少なくとも『輿地勝覽』の樂安・成川の條にみられる「屬」字の註は、「續」と記すべきところを誤まって「屬」と記したか、或は編者が恣意的に記したか、そのどちらかであろう。『輿地勝覽』では他處から移ってきた姓氏のうち、もとの郡縣名が註記される場合には、來姓・續姓・入鎮姓・入姓の區別が記されなかった。『輿地勝覽』の編者はもともとこれらの姓種を區別することに不熱心だったのであって、「來」・「續」・「屬」字の註記における杜撰さは、このような編者の姿勢に由來するものであろう。

『輿地勝覽』における姓種記載の杜撰さは、これに止まらない。『世宗實錄』地理志の八莒縣・南原都護府・福興縣の個所にみられる百姓姓を土姓と同様に扱いながら、平海郡の百姓姓だけは村姓とみなして「村」字を註記したのはその一例であり、丹密縣・南原都護府・福興縣の人吏姓を土姓と同様に扱いながら、洪州牧の次吏姓だけは吏姓とみなして「吏」字を註記したのもその一例である。⁽⁹⁾また、『世宗實錄』地理志において續姓とされた姓氏には「郷吏」と註記される場合が甚だ多いけれども、宜寧縣の續姓だけを吏姓とみなして「吏」字を註記したのもその一例である。

『世宗實錄』地理志姓氏條には、土姓・次姓・次吏姓・人吏姓・百姓姓・村姓・村落姓・外村姓・外姓・加屬姓・立縣後姓・立州後姓・賜姓・來姓・來接姓・入鎮姓・入姓・亡姓・續姓など數多くの姓種名が記されている。『輿地勝覽』の編者は、恐らくこれら様々な姓種の相互關係を理解しえないまま、姓種表記の簡略化を圖ったのであり、杜撰さはその結果生じたものであろうと思う。これらの姓種は、亡姓・續姓以外はすべて『古籍』に記されていたとみてよい。姓種の相互關係が理解できなかった點では、『世宗實錄』地理志の編者も同様であったに違いない。しかし、それらが理解できなかったからこそ、『世宗實錄』地理志の編者は『古籍』の姓種記載を尊重して、恣意を加えることなくそのまま轉記した

のであり、それ故に史料としての『世宗實錄』地理志が高い價值を有することになったのである。

世宗代の『關』は各道監司の報告書であつたが、高麗時代の『古籍』も地方からの報告をそのまま集成したものともてよいと思う。『世宗實錄』地理志の編者が『古籍』の記録を尊重して恣意を加えなかつたように、『古籍』の編者も地方からの報告を尊重して恣意を加えなかつたのであつて、それ故に今日、『世宗實錄』地理志姓氏條において雑多な姓種が傳えられている。一例を挙げると、村姓・村落姓・外村姓・外姓はいずれも同一の實體をさすものとみられるが、このように多様な名稱が傳えられたのは、もともと『古籍』を編纂する際の地方からの報告書において多様な姓種名が使われたからであり、今日の我々にとっては外村姓や外姓の「外」字が村姓の性格を知るための手掛りとなつて、高麗の社會構造や身分制度を明らかにする上で貴重な史料を提供しているのである。

『古籍』に記された姓種は、おおむね高麗前期の社會のあり方に即して把握されるべきものであるが、『古籍』自體は以下に述べるように高麗後期のものである。『古籍』の作成年代を推定するには、『世宗實錄』地理志姓氏條の全體を分析する必要があり、とりわけ來姓・入鎮姓・入姓・續姓に註記された郡縣名が検討されなくてはならない。しかし、本稿ではその考證を行う餘裕はないので、ごくおおまかな見當をつけておく程度に止めたいと思う。

高麗時代には、州・府・郡・縣のみならず、郷・部曲・所・莊・處・津・驛・院・館などさまざまな種類の地方行政區畫が設置された。これらの行政區畫は、それぞれがみな特定の身分的性格を帶びていた⁽¹⁰⁾。また、各村落の住民はそれぞれ同一の姓氏を稱していたから、人民がある行政區畫から別の行政區畫へ移住するというのは原則としてありえないことであつた。このような秩序が人民の流亡化現象によって崩壊し始めるのは一二世紀初頭のことであり、一二世紀後半には、流民を本眞に送還することなく、現住地において附籍し掌握する方式がとられるに至る⁽¹³⁾。人民を姓氏集團として把握するという高麗初期以來の原則が一二世紀後半になってこのように放棄されると、各行政區畫における人民の流出・流入はいっそう進展して行くのであり、その傾向は『關』が作成された李朝初期まで一貫して變らなかつたとみてよい。そし

て『世宗實錄』地理志姓氏條に記された來姓・續姓・亡姓が、高麗後期から李朝初期にかけての、各行政区畫における人民の流出・流入を一定程度反映しているのは、いうまでもないことであらう。

『世宗實錄』地理志姓氏條において來姓として記録された姓氏は、のべ三九六に達する。各行政区畫における人民の流出・流入は、流民を現住地において附籍し掌握するようになった一二世紀後半以後に本格化して行ったものとみられるから、來姓とされた三九六の姓氏の大半は武人政權成立（一二七〇年）以後に他處から移ってきたと考えられる。そして來姓はもともと『古籍』に記載されていたのであるから、『古籍』の作成年代は武人政權成立（一二七〇年）以後、かなりの年月が経過した時期とみなくてはならないであらう。

前節で掲げた史料Bによれば、迷原莊の姓氏としては、續姓として咸氏が記録されただけであつた。續姓としての咸氏は『古籍』作成以後に迷原莊に移住し、『關』作成當時そこに居住していた姓氏だから、『古籍』には迷原莊の姓氏は記載がなかったことになる。しかしこれは、『古籍』作成當時において迷原莊には記録すべき姓氏がなかったということを用意するだけであらう。迷原莊は恐らく一個の自然村落であつて、高麗前期には同姓集團が居住していたけれども、『古籍』作成當時にはすでに流出していたとみなくてはならない。

迷原莊のように續姓だけが記された郷・部曲・所・莊・處等は、『世宗實錄』地理志姓氏條においてかなりの數に達するのであつて、これらはみな、高麗前期の姓氏集團が『古籍』作成當時までに流出した例と考えてよい。州・府・郡・縣に比べて郷・部曲・所・莊・處等の規模は小さく、一個の同姓村落がそのまま一個の行政区畫とされるのが普通であつた。また、その住民は、一般郡縣民に比べてその身分が一段と低く、差別的扱いを受けていたから、もともと流亡化しやすい存在だったのである。それゆゑ『古籍』が作成されたのは、一部の郷・部曲・所・莊・處等において高麗初期以來の住民がすべて流出した後ということになり、やはり武人政權成立（一二七〇年）後かなりの年月が経過してからとみなくてはならない。

一方、『古籍』作成以後に他處から流入して『關』に把握された續姓はのべ五四一に達し、『古籍』作成以後に他處へ流出した亡姓はその二倍ほどになるから、『古籍』の作成は、『關』の年代（一二四四年——一四三二年）からかなりの年月を遡った時期に想定しなくてはならない。それ故、武人政權成立（一二七〇年）以後かなりの年月が経過した時期であり、しかも『關』の年代（一二四四年——一四三二年）からかなりの年月を遡った時期であるということから、本稿ではひとまず、『古籍』の年代を一二世紀後半及び一四世紀前半の一〇〇年間に限定しておこうと思う。そして『古籍』の年代をこのように限定してよいとすると、『古籍』に關して更なる次のようなことが指摘しうるであろう。

即ち、『古籍』は高麗前期に存在した姓氏のすべてを記載しているとは限らないということであって、郷・郡曲・所等の姓氏に關しては先に述べた通りであった。一般郡縣の場合も、『古籍』作成以前にすでに他處へ流出して、そのために『古籍』には記載されなかった姓氏があつて少しも不都合ではない。というよりもむしろ、當然そのような姓氏があつたとみるべきであろう。『古籍』作成以後に他處へ流出し、『世宗實錄』地理志姓氏條において亡姓とされた姓氏はかなりの數にのぼるのであるから、そのような傾向は『古籍』作成以前からのものとみてよいのである。

『關』は、世宗代當時に現存する姓氏だけを記録した文書であつた。『古籍』も同様に、高麗後期のある時點において現存する姓氏だけを記録したものであつた、というためには『世宗實錄』地理志姓氏條の全體を分析する必要がある。しかし假に、『古籍』が現存する姓氏だけでなく過去の姓氏をも記録しようとしたものであつたとしても、一二世紀後半ないし一四世紀前半の時點において把握しえなかつた姓氏は相當にあつたに違いない。『古籍』に記録されなかつた姓氏の存在を看過したまま、『世宗實錄』地理志姓氏條に基づいて高麗前期の姓氏のあり方を考えると、思わぬ誤りを犯すことになる。⁽¹⁴⁾

『世宗實錄』地理志姓氏條は、高麗初期以來の姓氏のあり方を一二世紀後半ないし一四世紀前半のある時點において把握した『古籍』と、世宗代において把握した『關』とを典據として記録されたものであつた。それでは、『世宗實錄』地

理志姓氏條は、各郡縣を本貫とする姓氏の集成なのであろうか。それとも、郷吏の姓氏の集成なのであろうか。或はまた、そのどちらでもないのであらうか。

二 『世宗實錄』地理志姓氏條の基本的性格

『世宗實錄』地理志姓氏條において續姓とされたのべ五四一の姓氏のうち、二〇四の姓氏にはもとの郡縣名が註記されている。次に掲げるのは、京畿の振威縣の場合である。

F 續姓一、趙（稷山來）。

振威縣の趙氏は稷山縣から移ってきたということになるが、果して稷山という郡縣名の註記は振威縣にくる前の居住地を示すものであろうか。また、趙氏は單に振威縣に移ってきたという理由で續姓として把握されたのであろうか。

全羅道の求禮縣の場合には、次のように記されている。

G 續姓二、朴（來處は知らず）・黃（義昌縣來、皆な郷吏）。

朴氏はどこから移ってきたかがわからないとされており、それ故、郡縣名の註記は轉入前の居住地を示すもののように受け取れる。しかし、「來處不知」ないし「不知來處」という註記の仕方は全羅道の場合の特色なのであり、慶尙道の場合には「本未詳」ないし「本不知」と註記されるのが普通である。⁽¹⁵⁾ 本貫を單に「本」字で表わすのは高麗時代の戸籍にも見出せるところであり、「本未詳」・「本不知」は本貫が不明という意味であらう。慶尙道大丘郡の屬縣である壽城縣の姓氏條には、次のように本貫という言葉が使われている。

H 續姓六、芮（岳溪來）・陳（桂城來）・崔（保寧來）・金二（一、金海來、一、清道來）・李（本貫は知らず。皆な郷吏たり）。

それ故、郡縣名の註記は轉入前の居住地を示すものではなく、本貫を示すものとみなしてはならないであらう。

史料Fの趙氏は、稷山縣の姓氏條には土姓と記されている。土姓というのはその土地の生え抜きの姓氏をさすから、稷

山縣は振威縣の趙氏の本貫であつたとみて間違いない。史料Gの黃氏、Hの芮氏・陳氏・崔氏・金氏も、『世宗實錄』地理志姓氏條によれば、それぞれ註記された郡縣において土姓とされているから、史料Fの趙氏の場合と同様に考えてよい。「稷山來」という註記は、振威縣に轉入する前の趙氏の居住地を示すものではなかった。趙氏の先祖は稷山縣に居住していたに違いないが、一度他の郡縣に移り、そこから振威縣にやってきたということも十分に考えられるのである。他處から轉入してくる姓氏に關して、それまでどこに居住していたかということが問題とされず、もっぱら本貫だけが問題とされたのは、姓氏というものの性格を考えてみれば至極當然のことであつた。本貫の制度が確立して以後は、少なくとも良民身分であれば本貫のない姓氏というのは考えようがない。⁽¹⁶⁾ 姓氏は本貫を稱することによって様々な社會的機能を果たすことができたのであり、本貫は姓氏の本質的な屬性であつたといつてよいのである。それでは次に、史料Fの例でいえば、稷山縣を本貫とする趙氏は單に振威縣に居住しているという理由でその姓氏條に記録されたのであらうか。

振威縣の姓氏條の全文は次の通りである。

土姓三、李・金・崔、亡姓二、柳・宋、續姓一、趙（稷山來、松莊一、柳。

松莊というのは、世宗六年に水原府から振威縣に來屬した行政區畫である。亡姓とされた柳・宋の二氏は、『開』が作成された世宗代には振威縣に居住していなかった。趙氏が單に振威縣に居住しているという理由で姓氏條に記録されたとすると、世宗代當時、振威縣にはわずか李・金・崔・趙の四氏しかいなかったことになる。或は少なくとも、國家は振威縣においてこれら四氏しか掌握していなかったことになる。しかしながら、そのようなことが事實であつたとは、到底考えられない。亡姓とされた柳・宋の二氏は、滅亡してしまつたわけでは決してない。長い年月の間に次々と縣外に流出し、遂には振威縣に居住する者が一人もいなくなつたというだけの話である。土姓とされる李・金・崔三氏の場合もかなりの人數が縣外に流出したと把握すべきであり、續姓とされる趙氏でさえ、その一部が縣外に流出したとみて少しも不都合ではない。そしてこのように、數多くの人間が縣外に流出する一方、縣外の各地からは様々な姓氏を稱する者が振威縣に流

入したとみなくてはなるまい。

高麗の人民がその本貫から流出する現象は、一二世紀初頭に目立ち始める。そしてすでに述べたように、一二世紀後半には流民を現住地において附籍し掌握する方式がとられたから、以後、人民が本貫から流出する現象はいっそう進展して行ったとみるべきであり、それ故に『世宗實錄』地理志姓氏條には數多くの亡姓が記録されたのであった。振威縣においても一二世紀後半以來、一貫して縣外から流入する人民を附籍してきたはずであるから、世宗代當時において縣外から流入した様々な姓氏のうち、趙氏だけが附籍されていたなどとは到底考えられない。趙氏が振威縣の姓氏條に記録されたのは、以下に述べるように、單に振威縣に居住していたからでは決してなかった。

先に史料F・G・Hを検討した際に明らかにしたように、郡縣名の註記はそれぞれの姓氏の本貫を示すものであった。F・G・Hの場合には、郡縣名が註記された姓氏はいずれもそれぞれ註記された郡縣の土姓であったが、次のように、郡縣名の註記された姓氏がその郡縣の續姓であった場合でも、その註記は本貫を示すものとみなくてはならないであろう。即ち、慶尙道玄風縣の姓氏條には、

I 續姓一、金(安定來、今、郷吏たり)。

とあり、慶尙道比安縣の姓氏條には、

J 安貞姓三、吳・林・羅、續姓二、朴(密陽來)、金(本は知らず、皆な郷吏たり)。

とある。史料Fにおいて稷山が趙氏の本貫を示すように、史料Iにおいても「安定」が金氏の本貫を示すものとみなくてはならない。史料Jによれば、安貞(安定)縣の金氏は本貫不明の續姓であるが、安貞を新たに本貫としたのであろう。そして安貞の金氏の一部が玄風縣に移り、金氏が新たに玄風縣の姓氏として把握されたことによって、その本貫が「安定」と註記されたのであった。

史料Jの場合には、本貫が不明だった故に金氏は新たに安貞を本貫としたように受け取られやすいが、実際には本貫の

明・不明を問わず、他處から流入してその郡縣の姓氏として認められるということが、即ちその郡縣を新たに本貫とするということの意味したのではないか。安貞の朴氏の本貫は密陽とされているが、しかし、安定の姓氏として把握されたということは、朴氏が新たに安貞を本貫としたということの意味すると思うのである。この點に關して示唆的なのが、次の一連の記録である。

K₁〔全羅道和順縣條〕續姓三、朴（順天）・金（晉州）・金（茂珍、皆な郷吏）。

K₂〔慶尙道晉州牧條〕續姓二、金（禮州來）・朴（本、未詳）。

K₃〔慶尙道寧海都護府（禮州）條〕土姓六、朴・金・黃・李・林・申。

晉州の金氏の本貫は、禮州と註記されている。寧海都護府（禮州）の土姓である金氏は、その一部が晉州に移り、新たに晉州を本貫とすることによって晉州の姓氏として把握された。それ故に、晉州の金氏の一部が更に和順縣に移り、和順の姓氏として把握されると、史料K₁にみられる如く、彼らの本貫として晉州が註記されたのであった。

史料Fに立ち返っていえば、趙氏の本貫は振威縣なのであり、註記された稷山はもとの本貫を示すものとみなくてはならないであろう。振威縣に居住していた趙氏は、何らかの事情で本貫が稷山縣から振威縣に變更されたのであり、振威縣を本貫としたからこそ趙氏は、『世宗實錄』地理志姓氏條に續姓として記録されることになったのである。そして續姓とされた姓氏が、それぞれの郡縣等を新たに本貫とした故に『關』に記録されたとすると、『古籍』においても行政區畫ごとにそこを本貫とする姓氏が記録されていたとみてよく、それ故、『世宗實錄』地理志姓氏條は全體として本貫の記録とみてよいであろう。

先に述べたように續姓とされた五四一の姓氏のうち、二〇四の姓氏には郡縣名が註記されており、二〇四例のうち、その姓氏が、註記された郡縣の土姓である場合、即ち史料Fのような場合は一五〇例を占め、史料Iのように續姓である場合は九例、以下、天降姓五例、亡姓四例、外村姓二例、立州後姓・來姓・亡來姓・入鎮姓各一例となっている。そのほか

に『世宗實錄』地理志姓氏條に見出せない姓氏が三〇例あるが、その一例を掲げておこう。

ㄱ(全羅道珍原縣條) 續姓三、李(保寧)・金(長興)・金(來處を知らず。皆な郷吏)。

李氏は保寧縣姓氏條では亡姓とされているが、金氏は長興都護府姓氏條には見出せない。しかし、見出せないからといって、長興都護府姓氏條の記録に不備があるとする必要はないし、珍原縣姓氏條の記録が間違っているわけでもない。もともと『世宗實錄』地理志姓氏條には、高麗初期から李朝初期に至るまでの、各行政區畫を本貫とした姓氏がすべて記録されたわけではなかった。『古籍』と『關』によって把握された姓氏が集成されたにすぎない。高麗初期から『古籍』作成時までのすべての姓氏が『古籍』に記録されたという保證はないし、まして『關』は世宗代當時において現存していた姓氏のみを記録したものであった。史料に即していえば、たぶん『古籍』作成後に、新たに長興府を本貫とした金氏がいたが、『關』作成時にはすでに府外に流出していて、その一部は新たに珍原縣を本貫とした、ということは十分に考えられるのである。それ故、長興の金氏のように『世宗實錄』地理志姓氏條に見出せない三〇例の姓氏は、いずれもかつてその郡縣を本貫としていたとみてよいと思う。

ところで、すでに引用したいくつかの記録からも明らかのように、續姓には郷吏であることを示す註記が甚だ多い。『郷吏』以外に「人吏」・「郷役」・「長役」などの言葉も使われているが、實體は同一であろう。それらを合わせると、のべ五四一の姓氏のうち二八八の姓氏が郷吏であったことになるが、郷吏であっても註記されなかった場合も考えられるので、實際の郷吏はもっと多かったであろう。それ故、土姓を土族、續姓を郷吏とする見解があり、更に近年では『世宗實錄』地理志姓氏條を郷吏の姓氏が集成されたものとする見解が吉田光男氏によって提出されているのであるが、しかし、次のように續姓は必ずしも郷吏の姓氏ではなかった。

〔江原道杆城郡條〕 烈山姓……續姓五、金・全(旌善來)・孫(平海來)・朴(甫城來)・林(蔚珍來、全・孫・朴・林四姓は皆な郷吏)。

烈山縣において續姓とされた五つの姓氏のうち、金氏は郷吏ではなかった。同じ江原道の高城郡においても續姓とされた五つの姓氏のうち、三姓だけが郷吏とされ、通川郡では五姓のうち四姓が郷吏とされている。續姓がすべて郷吏の姓氏であれば、五姓のうち、「全・孫・朴・林四姓は皆な郷吏」という註記がなされるはずではないのである。⁽¹⁸⁾

續姓は、『古籍』作成以後にその居住地を新たに本貫とした姓氏であった。續姓とされた姓氏に郷吏であることを示す註記が多いのは、その居住地を新たに本貫とした者の多くが郷吏であったことを意味している。高麗後期から李朝初期にかけて、どの行政区畫においても外部から様々な姓氏が流入・定着し、彼等はそこにおいて附籍されていたはずであるが、しかし、その居住地を新たに本貫とした者はそのごく一部にすぎなかった。本貫變更の事情は多様であったに違いないが、なぜ本貫を變更した者の多くが郷吏であったのかという質問に答えるのは、さほど困難ではないと思う。要するに、外部から流入・定着して郷吏となった者は、その居住地を新たに本貫とすることが義務づけられていたのではないか、と思うのである。

次の記録は、郷吏の本貫についていくらか示唆するところがあると思う。

〔黃海道康翎縣條〕來姓二、趙（海安來）・任（長淵來、右二姓、洪武乙亥に本縣殘亡せるを以て都評議司に報じ、附近を以て移入して郷吏と爲す）。

「洪武乙亥」は太祖四（一三九五）年であるから、ここに「來姓」とあるのは明らかに續姓の誤りである。任氏は長淵縣姓氏條では土姓であるが、趙氏は松禾縣姓氏條によれば海安縣の續姓とされており、しかも郷吏と註記されている。それ故、康翎縣に「移入」される以前の趙・任兩氏は、いずれもそれぞれ海安・長淵において郷吏であったとみてよい。康翎縣の「殘亡」という理由で、海安・長淵の郷吏の一部が國家の命令で康翎縣に移屬させられたのであろう。そして康翎縣に移屬させられることによって趙・任兩氏が新たに康翎縣を本貫としたのは、彼等の希望ないしは意志によるものではない。郷吏はその職責を遂行する行政区畫を本貫とする、という規定があったに違いない。李朝初期の戸籍法を研究し

た有井智徳氏は、牧子・郷吏・驛吏の戸籍が一般郡縣民のそれとは別個に作成された事實を明らかにしている。⁽¹⁹⁾そして、有井氏が提示した記録によると、驛吏の場合は「本驛を以て稱して本貫と爲す」という規定であつたから、郷吏もその居住地を本貫とする規定があつたとみて不都合はないのである。

『世宗實錄』地理志姓氏條を郷吏の姓氏が集成されたものとする吉田光男氏の見解は、次のような根據に基づいている。即ち氏によれば、『世宗實錄』地理志姓氏條には、そこを本貫としない姓氏を記載する場合がある一方、姓氏記載のない郡縣にもそこを本貫とする姓氏が少なからず存在する。このように姓氏條の記載とその當時存在した姓氏の本貫とが必ずしも一致しないことから、吉田氏は『世宗實錄』地理志の姓氏記載基準が本貫表記以外のところにあつたとする。そして姓氏條に記載された姓氏と郷吏との密接な關係を示す記録をいくつか提示することによって、『世宗實錄』地理志姓氏條は、邑司を構成する郷吏の姓氏を集成したものであつたと結論づけるのである。

吉田光男氏が提示した史料によれば、世宗代の宦者尹鳳は先祖の代から黃海道（21）の瑞興に居住するが、その本貫は海州でつた。ところが、『世宗實錄』地理志の海州牧姓氏條には尹氏がみえないのに、瑞興都護府姓氏條に尹氏が土姓として記されている。そこで吉田氏は、『世宗實錄』地理志姓氏條にはそこを本貫としない姓氏を記載する場合があるとしたのであるが、しかし、このような解釋はたぶん氏の錯覺に基づくものであらうと思う。瑞興尹氏は土姓とされているから、瑞興が洞州と稱していた高麗初期以來の生え抜きの姓氏であり、勿論、『關』作成當時も瑞興に居住していた故に亡姓とはされなかつた。尹鳳及びその先祖が尹氏のすべてではない。瑞興に居住する尹鳳の本貫が海州であつたからといって、世宗代に瑞興に居住し、かつそこを本貫とする尹氏がいなかったなどとは決していえないのである。

尹鳳の本貫が海州であるということは、少なくとも尹鳳の先祖がかつて海州に居住していたことを意味する。海州牧姓氏條には尹氏がみえないから、尹鳳の先祖はたぶん『古籍』作成以後の時期に新たに海州を本貫とし、やがて瑞興に移住したのであらう。海州牧姓氏條に尹氏がみえないのは、『古籍』作成後に新たに海州を本貫とした尹氏がやがて海州から

流出し、『關』作成當時になると、そこに居住する者が一人もいなくなっていたからであつた。海州牧姓氏條に尹氏の記載がなくとも、海州を本貫とする尹氏はこのように存在しうる。一般に、姓氏條に記載がなくとも、そこを本貫とする姓氏が存在するのは當然のことであつて、もし『古籍』が『關』と同様にそれぞれの行政區畫を本貫とし、かつそこに現に居住する姓氏だけを記録したものであったとすると、尙更そうであらう。

『世宗實錄』地理志の姓氏記載基準が本貫表記以外のところにあつたとする見解は、成立しがたい。吉田光男氏によつて提示された、姓氏條に記載された姓氏と郷吏との密接な關係を示す記録は興味深いものがあるけれども、しかし、特定の行政區畫を本貫とし、かつそこに居住する者が郷吏だけになつてしまえば、記録の上で姓氏條に記載された姓氏と郷吏とが密接な關係を示すのは至極當然のことなのである。『世宗實錄』地理志姓氏條には、世宗代當時の郷吏の姓氏はすべて記録されている。しかし、郷吏の姓氏だけが記録されたものではなかつた。⁽²²⁾郷吏はその居住地を本貫とすることが義務づけられていた故に、結果として郷吏のすべての姓氏が記録されることになつたのであつて、『世宗實錄』地理志姓氏條そのものは『古籍』及び『關』によつて把握された本貫の集成なのである。

おわりに

『世宗實錄』地理志姓氏條は、高麗及び李朝初期の歴史を研究する上で貴重な史料であるにも拘らず、從來、姓氏條そのものの研究がすこぶる遅れていたということから、本稿ではその體系的研究の第一歩として、姓氏條が典據とした二種類の文書の性格を検討し、それをふまえて姓氏條の基本的性格を考察した。本稿で述べたことをまとめると、次の通りである。

(イ) 『世宗實錄』地理志姓氏條は、高麗時代に作成された『古籍』と、李朝初期の世宗代に作成された『關』という二種類の文書に基づいて記載された。各道の監司の報告書である『關』は、高麗初期以來の姓氏のうち、世宗代當時にお

いて現存した姓氏だけを集成したものであった。『慶尙道地理志』姓氏條の記録は部分的には獨自の史料的价值を有するものであるが、全體としては『關』に比べると相當に不備がある。『慶尙道地理志』姓氏條などの記録があまりにも不備であったために、一定の基準にもとづく姓氏の再調査があらためて各道の監司に命ぜられ、その命令に應じた報告書こそが『關』であったと考えられる。

(ロ) 『關』と同様に、高麗時代の『古籍』も地方からの報告をそのまま集成した文書とみてよい。『古籍』はおよそ一三世紀後半ないし一四世紀前半のある時点における姓氏の集成であるが、その時点において現存する姓氏だけを記録したものかどうかは明らかではない。しかし、いずれにせよ『古籍』が高麗前期に存在した姓氏のすべてを記載したわけではない、ということは確實である。『新增東國輿地勝覽』姓氏條は高麗末期の『周官六翼』などを典據としたから、部分的には『世宗實錄』地理志姓氏條よりくわしいけれども、全體として姓種の記載がいちじるしく杜撰である。『古籍』の姓種記載を尊重して、恣意を加えることなくそのまま轉記した『世宗實錄』地理志姓氏條の史料的价值は、『新增東國輿地勝覽』姓氏條よりもはるかに高い。

(ハ) 『世宗實錄』地理志姓氏條は、各行政區畫を本貫とする姓氏の集成であったが、高麗前期から李朝初期にかけてのすべての姓氏が記録されたわけではない。高麗前期の人民は、原則としてその居住地を本貫としていた。高麗後期に入つて人民の本貫からの流出が進行すると、居住地と本貫との分離が一般化して行く。『關』は、世宗代當時において各行政區畫を本貫とし、しかも現にそこに居住する姓氏だけを記録したものであった。また、『古籍』が作成された一三世紀後半ないし一四世紀前半の時代において、すでにそのメンバーのすべてが本貫から流出したという姓氏がかなりあったと考えられるから、高麗初期以來の姓氏がすべて『古籍』に記録されたとはいえないのである。『世宗實錄』地理志姓氏條を史料として活用する場合には、このような點が特に留意されなくてはならない。

本稿は、『世宗實錄』地理志姓氏條に関する序論的研究であつて、『古籍』の作成年代をいっそう限定するためには、ま

た、『古籍』が當時現存する姓氏だけを記録したものでどうかを明らかにするためには、姓氏條全體を分析する必要がある。『古籍』に記録され、『世宗實錄』地理志姓氏條に轉記された雑多な姓種名は、高麗前期の郡縣の構造を理解する上で貴重な手掛りとなりうるものであるが、従来、姓種全體に對する統一的把握が試みられることはなかった。それ故、『世宗實錄』地理志姓氏條の全體を分析することが次の課題である。

註

- (1) カッコの部分は、原文では割註である。以下、同じ。
- (2) 許興植氏は、『世宗實錄』地理志姓氏條の典據として、史料A・Bに基づいて『古籍』・『道關』・『道關續錄』の三つの文書を挙げ、『道關』・『古籍』・『道關續錄』の順序で作成されたとする。許興植『高麗社會史研究』(ソウル、一九八一年)三九一頁参照。姓氏條の記載に關して、基本的な事柄さえも研究者の共通理解を得るまでには至っていないということの一つの例であるが、許氏のように『道關』のほかに『道關續錄』があったとするのは、明白な誤謬である。この點については、北村秀人「高麗時代の『所』制度について」(『朝鮮學報』五〇、一九六九年)六九頁の註(18)参照。なお、姓氏條が『古籍』と『關』の二つの文書を典據としたことについては、つとに武田幸男氏によつて指摘されていたことであつた。武田幸男「高麗時代の『百姓』」(『朝鮮學報』二八、一九六三年)二九頁の註(10)参照。
- (3) 末松保和「新增東國輿地勝覽とその索引」(『靑丘史草』第二、一九六六年)一四二・一四三頁参照。
- (4) 土姓ないしは來姓とされていた可能性が高いと思う。
- (5) 花村美樹「周官六翼と其の著者」(『京城帝國大學法學會論集』一二の三・四合輯、一九四一年)。
- (6) 『世宗實錄』地理志の序には、「東國の地志は略ぼ三國史に在り。他に稽う可きもの無し。我が世宗大王、尹淮・申穡等に命じて州郡の沿革を考えしむ。乃ち是の書を撰す」とあり、編纂者の筆頭として尹淮の名がみえるので、『尹淮地理志』ともよばれたのであらう。許興植氏も、『尹淮地理志』を『世宗實錄』地理志とみている。前掲、許興植『高麗社會史研究』三九一頁の註(20)参照。
- (7) 許興植氏は、『古籍』が『周官六翼』そのものであった可能性を示唆している。前掲、許興植『高麗社會史研究』三九一頁の註(20)参照。
- (8) 郷・部曲・所等の行政區畫は、高麗後期から李朝初期にかけて徐々に消滅して行く。それ故、『古籍』には記載されたけれども、その後、行政區畫そのものが消滅したために、『關』には記載されなかつた郷・部曲・所等は少なかつたに違いない。そして、『世宗實錄』地理志の編者は、郷・部曲・所等

に關しては『關』に記載されたそれらに限定して、『古籍』と比較・對照しながらその姓氏を記したのではないかと思う。

(9) 八宮縣・福興縣・丹密縣は、それぞれ星州牧・淳昌郡・尙州牧の屬縣である。

(10) 旗田巍「高麗王朝成立期の『府』と豪族——郡縣制度の性格の一端——」(『法制史研究』一〇、一九六〇年、『朝鮮中世社會史の研究』に再録)。

(11) 武田幸男「淨兜寺五層石塔造成形止記の研究(1)——高麗顯宗朝における若木郡の構造——」(『朝鮮學報』二五、一九六二年)。

(12) 拙稿「高麗の歴史的位位置について」(『朝鮮史研究會論文集』二一、一九八四年)第三章參照。

(13) 北村秀人「高麗時代の貢戸について」(『人文研究』〈大阪府大〉三二の九、一九八一年)。

(14) 前掲、武田幸男「淨兜寺五層石塔造成形止記の研究(1)——高麗顯宗朝における若木郡の構造——」は、『世宗實錄』地理志姓氏條に基づいて、一一世紀前半の若木郡が李・柳・韓・金の四つの姓氏集團から構成されていたとしたが、再考の餘地があると思う。

(15) 全羅・慶尙兩道以外の場合には、このような類の註記はほとんどない。

(16) 高麗の本貫制度に關しては、金壽泰「高麗本貫制度の成立」(『震檀學報』五二、ソウル、一九八一年)參照。金氏は、高麗の本貫制度が一〇世紀中葉に成立したとする。氏はまた、奴婢にも本貫があったとするが、この點は疑問である。

(17) 李成茂「朝鮮初期の郷吏」(『韓國史研究』五、ソウル、一九七〇年)。なお、吉田光男「李朝初の地方支配について——『世宗實錄』地理志姓氏條の性格検討をめぐって——」(『社會經濟史學』四四の五、一九七九年)二頁にその批判がある。

(18) 續姓が必ずしも郷吏の姓ではないということについては、鄭杜熙「朝鮮初期地理志の編纂」(『歴史學報』六九、ソウル、一九七六年)九三頁の註(24)においてすでに指摘されている。

(19) 有井智徳「李朝初期の戸籍法について」(『朝鮮學報』三九、四〇合輯、一九六六年)六九—七一頁。

(20) 『世宗實錄』卷二五、六(一四二四)年七月癸巳の京畿江原道程驛察訪の啓。

(21) 前掲、吉田光男論文六頁。

(22) 『世宗實錄』地理志の姓氏が郷吏のそれであったとする吉田光男氏は、地理志に姓氏記載を缺く郡縣として、京都漢城府、舊都開城留後司、全羅道濟州島の旌義縣・大靜縣、平安道の平壤府、咸吉道の咸興府・慶源都護府・甲山郡・鏡城郡・會寧都護府・穰城都護府・慶興都護府を列舉し、これらの郡縣には郷吏がいなかった故に、姓氏が記載されなかったとする。明解な説明ではあるが、實は咸吉道の咸興府條には、入鎮姓として一五の姓氏と向國入姓の朱氏とが記されている。吉田氏が明らかにしたように咸興府には土官が置かれた故に、確かに郷吏がいなかったけれども、しかし、このように姓氏が記載された。それ故、いくつかの郡縣において姓氏が記載されなかった理由は、郷吏の有無とは別個のところに求めなくてはならない。京都漢城府・舊都開城留後司・平壤府に關していえば、恐らく李

朝に入つて、それらを本貫の對象とはしないということが定められ、世宗代においてもそれが遵守されていたのではないか。そして、濟州島の二邑及び威吉道の慶源等六邑は高麗末期・李朝初期に置かれた邑だから、『古籍』に記載されていたはずはなく、また、『關』が作成された世宗代において、それらを本貫とし、かつそこに居住する者が皆無であつた故に、『世宗實錄』地理志に姓氏が記載されなかつたのであらう。

feudal struggle, and as for North East of China, it can also be evaluated as the initial stages of the national liberation movement that lead the Yihetuan Movement, anti-Russian and anti-Japanese struggle.

A FUNDAMENTAL EXAMINATION OF THE “ENTRY ON SEONGSSI 姓氏” OF THE “TREATISE ON GEOGRAPHY” OF THE *SEJONG-SILLOK* 世宗實錄

HAMANAKA Noboru

The “Entry on Seongssi” of the “Treatise of Geography” of the Sejong-Sillok is an invaluable source for the history of Korea of the Koryeo 高麗 and early Yi Dynasty 李朝 periods. Up to now, however, the “Entry on Seongssi” has not been studied as such, thus in this article I concentrated on this very text and analyzed it using the two texts underlying it.

The “Entry on Seongssi” is ultimately based on two texts, on the Koryeo period text Kocheok 古籍 and on the Kwan 關 of the Yi Dynasty. The latter being a report by the inspector of the various provinces assembles all the seongssi in the various administrative units at the time of Sejong. The former is a compilation of seongssi in use in the latter half of the 13th and the first half of the 14th centuries, which was made by the same way of Kwan.

In the early Koryeo period, villages were one-family-name organized, i. e., people’s pongwan 本貫 would generally correspond with their place of residence. Towards the later Koryeo period the people became more mobile and generally there were more people living away from their pongwan. Since the “Entry on Seongssi” of the Sejong-Sillok is a compilation of seongssi, with their pongwan in the various administrative units, it reflects the social changes that took place around the end of the Koryeo and beginning of the Yi Dynasty periods partly. However, it must be properly kept in mind that the “Entry on Seongssi” did not record all the seongssi since the early Koryeo period.